Osaka University Knowledge Archive

Title	Presenteeism in college students : reliability and validity of the Presenteeism Scale for Students
Author(s)	松下, 正輝
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58246
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【53】

氏　　名	松下正輝（まつした まさてる）
博士の専攻分野の名称	博　士（医　学）
学　位　記　番　号	第　24375　号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 医学系研究科予防環境医学専攻
学　位　論　文　名	Presenteeism in college students:reliability and validity of the Presenteeism Scale for Students （大学生におけるプレゼンティーイズム：学生版プレゼンティーイズム・スケールの開発）
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　杉田　義郎 （副査） 教　授　武田　雅俊　　教　授　井上　洋一

論文内容の要旨

〔　目　　的　〕

プレゼンティーイズムとは、長期欠勤の対語として造られた言葉であり、出勤しているが病気や体調が優れないことによる遂行能力の低下を表し、測定可能なものであると定義される。プレゼンティーイズムは、これまで勤労者を対象に研究されており、産業保健領域におけるプレゼンティーイズムは経済的な損失につながることが報告されている。一方、近年心身の不調により大学保健センターを受診する学生が増加しており、彼らの多くが学業に困難を抱えている。これまで長期欠勤による学業、および学生生活の質への悪影響は多数報告されているが、学生生活におけるプレゼンティーイズムは報告されていない。そこで、本研究では、学生版プレゼンティーイズム尺度(以下PSS)を開発し、学生におけるプレゼンティーイズムについて報告することを目的とした。

〔　方法ならびに成績　〕

日本の4大学の学生5701名において横断調査を行い、回答を得られた4968名のうちデータ欠損のない4794名(平均18.56±1.82歳、男性2774名)をデータ分析の対象とした。PSSは13項目版Stanford Presenteeism Scaleを参考に作成し、本研究では学校保健現場において用いるため「労働」を「学業」に変更して用いた。さらに122名の大学生において、2週間の再検査法による信頼性の検討と、生活の質を評価するMedical Outcomes Study 36-item Short-Form Health Survey(SF-36)による並存的妥当性の評価を行った。

調査の結果、学生の59.2%が何らかの健康問題をもっていることが明らかになった。また精神的な不調がある学生は、その他の健康問題をもつ学生に比べてプレゼンティーイズムの程度が高いことが明らかになった(P with Bonferroni correction <0.001)。PSSの因子的妥当性については、主因子法(プロマックス回転)により、再現性の高い2因子を抽出し、先行研究とほぼ同様の因子構造を持つことを確認した。また各因子の内的整合性についても良好な値であった(第Ⅰ因子Cronbach's $\alpha=0.87$, $P<0.001$、第Ⅱ因子Cronbach's $\alpha=0.81$, $P<0.001$)。プレゼンティーイズムの程度を示すWork Impairment Score(以下WIS)の内的整合性は0.90、再検査法のWISの相関係数は0.80($P<0.001$)であった。また生活の質の質問票であるSF-36とWISの相関係数は$\rho=-0.60$ ($P<0.001$)であった。

〔　総　　括　〕

本研究において、我々が開発したPSSは十分な信頼性と妥当性を備えていることから、学生のプレゼンティーイズムを評価するために有用であることが示唆された。また学生の約6割が何らかの心身の不調を有し、特に精神的不調によるプレゼンティーイズムの状態は、学生生活に大きな影響を与えていることが明らかになった。以上のことから、大学生におけるプレゼンティーイズムの問題の啓発と早期対処の重要性が示唆された。

論文審査の結果の要旨

近年、心身の不調を訴え大学保健センターや学生相談室を受診する学生が急増している。本研究はPresenteeism Scale for Studentsを開発し、学生の心身の不調をPresenteeismという概念を用いて報告した研究である。Presenteeismとは、出勤しているが心身の不調により作業遂行能力が低下した状態を意味し、これまで欧米の産業保健領域において研究されてきた。その概念を学生の包括的な健康管理に応用した報告はなく、その着想点は評価に値する。また研究手法についても、多施設、かつ非常に大きなサンプル（4国立大学、$n=5701$）を対象に研究を実施しているため、高い一般化可能性を備えている。結果に関しては、学生の約6割が何らかの心身の不調を有し、特に精神的不調によるPresenteeismの状態は、学生生活に大きな影響を与えていることが明らかになった。そのため、大学生におけるPresenteeismの問題の啓発と早期対処の重要性を示すものであった。本論文は学生の生活の質の向上に寄与し、ひいては研究拠点である大学全体のパフォーマンスの向上に貢献する可能性を示唆している。

以上のことから、審査委員一同は、本研究で得られた知見が今後予防医学領域の研究の進歩に貢献すると評価し、博士（医学）の学位授与に値するものと認める。